

第6回 明治時代のシラウオ缶詰工場 ～宍道湖・中海の豊かな水産資源と松江の商工業～

シラウオ(白魚)といえば宍道湖七珍の一つにも数えられ、松江の名物として人々に親しまれてきた。ところが、戦後以降その漁獲高は減少の一途をたどり、このままでは食文化自体の存続も危うい状況といえる。現在編纂を進めている松江市史ではこうした松江の食文化や水産業も重要なテーマの一つとして着目しているが、このほど史料調査を行う中で、明治時代のシラウオの缶詰工場(罐詰製造所)に関する史料が松江市内のとある旧家の古文書の中から大量に発見された。



今回発見されたシラウオ缶詰工場に関する史料

写真左下の紙袋には「白魚罐詰(缶詰)書類入」と書かれている

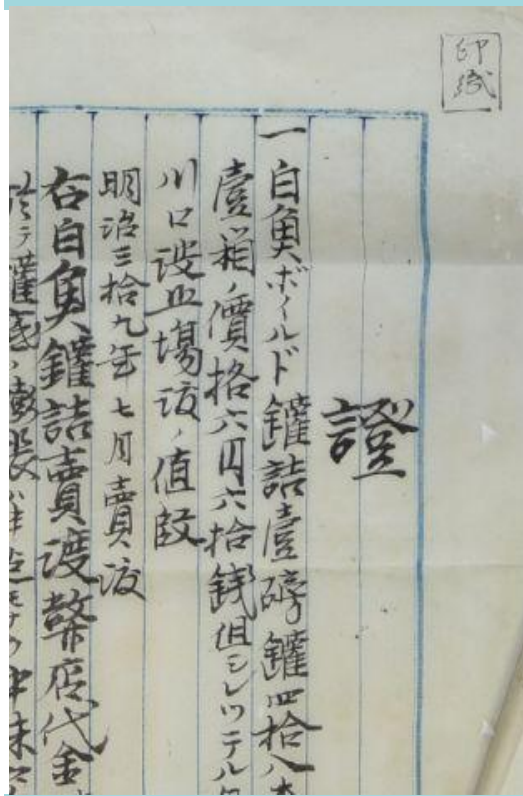
それらは主に工場経営の中でも製品取引に関する記録(封書・葉書などの書簡、荷物の運送明細書、取引契約書の控えなど)で、全体を紐で縛った状態で見つかった。それらはさらに紐や袋などでまとめられるなどして、いくつかのグループをなしていた。ちなみに史料調査ではこうした史料の“かたまり”を壊さずに一点一点の内容を確認していく。こうした史料群がなすグループのありようも重要な歴史情報となるのである。さて、史料の年代は明治39年(1906)頃のものであり、その点数はおよそ360点にのぼった。今回はこの明治期の缶詰工場の史料を読み進める中で、現時点で明らかになったことを紹介したい。

この缶詰工場(罐詰製造所)の厳密な所在地はわからないが、松江市内(橋南)の天神川沿いと思われる。シラウオ缶詰(「白魚罐詰」)は、史料の中では「白魚ボイルド」や「白魚味付」と書かれている。文字通り加熱調理して缶詰にしたようである。史料によってはシラウオの「大和煮」と書かれたものがあり、甘辛く調理されていたようである。

さらに史料を見ていくと、シラウオ以外のものも缶詰にして販売していたことがわかる。それらは、鯛・筍(タケノコ)・サザエ・松茸(マツタケ)・松露・蛸(タコ)・イサザなどで、水産物以外のものも含まれる。これらも「筍ボイルド」・「松茸ボイル」・「サザエ味付」などとあり、シラウオ同様に加熱調理されて製缶されていたようである。「水煮」といった日本語を用いず、英語の「ボイル」を用いている点が興味深い。

冒頭に「白魚ボイルド罐詰」と書かれた取引契約書の控え

このあと運賃の扱い、品質の保証などに関する取り決めが記されている



さて、それらの缶詰の主な取引先は、大阪市や神戸市の食料品を取り扱う商店であった。今回みつかった史料の多くは、そうした商店から郵送されてきた書簡類(手紙や葉書)である。それらを読んでいくと、その取引の実態が明らかになる。取引はまず松江の缶詰工場が関西地方の商店に対して缶詰の「見本」を送ることから始まる。それに対して、関西の商店は感想を書き送っている。

そうした「見本」が好評価を得ると、注文・販売へと事が運ぶ。史料の中には、「マツタケハヤクツメ」(松茸早く積み)といった注文依頼の電報、代金送金に関する書簡、取引契約書の控えがある。しかし、その一方で、値段が高いとして取引を断られたり、缶詰を開けると「身砕け居りて売物にあいならず」といった厳しい評価を受けることもあった。アク(灰汁)抜きが足りないとか、缶詰内の「液汁」を減らしてほしいなど、味や色、煮加減

など品質に関する注文は非常に細かい。こうした指摘を受けて工場側は試行錯誤を重ねたことであろう。関西の商店との間での大量の書簡類はそうした試行錯誤の証であり、活発なやりとりを物語るものである。

ところで、松江の工場生産した缶詰はいかにして関西方面に輸送されたのであろうか。松江に鉄道が開通するのは明治41年である。缶詰取引において荷物の到着と受取を証明するためか、関西の商店は運送業者が発行した荷物明細書(「回漕貨物報告書」などと呼ばれる)を書簡に同封して松江の缶詰工場へ郵送している。それによると「右の貨物、松江港より境港まで舢舨(はしけ、小船のこと)、境港より汽船にて回漕」と記されている。関西方面への輸送は関門海峡を経由する汽船が担っていたのである。

工場がどれほどの量の缶詰を生産していたかはわからない。しかし、運賃のかさむ遠隔地に向けては、小口の取引では商売が成り立たないであろうから、相当な生産量(漁獲量)があったと思われる。販売先が遠く鉄道も無い状況では、全国の缶詰業者と競合する上で極めて不利である。そうした状況のもと、松江の業者による関西での積極的な商取引を支えていたのは宍道湖・中海の豊富な水産資源量であろう。

なお、一連の史料の中には明治 39 年の「白魚罐詰(缶詰)支払帳」という、缶詰の原料となるシラウオの仕入れに関する帳面がある。それによると、「タネ」・「初」など女性と思われる漁師からもシラウオを仕入れており、当時の人々の生活の一端も明らかとなる。今回紹介した缶詰工場に関する一連の史料は、明治期の松江の商工業の実態を明らかにすると同時に、当時の宍道湖の豊かな水産資源を物語る史料といえる。

(平成 23 年 3 月 2 日 文化財課史料編纂室 沼本 龍)